

有権者の耳目から逃げ党利を守る 党首会談とは醜悪怪談

10月31日付の『毎日』「社説」の論題は「党首会談」。「解せないのは、党首会談の開催を理由に、31日に実施予定だった党首討論が急遽中止になり、延期されたことだ。」「政治は表の場だけで決まるものではない。秘策もあるだろう。ただし、密室批判を招かないよう配慮することも政治家の責務だ。」「福田首相も小沢氏も、今度はぜひ党首討論の場で堂々と持論を展開してもらいたい。」。

右の3カ所の文章が主張らしきものだが、小言で説諭で嘆願である。手厳しい批判など毛ほども感じられない。

次のようなゆゆしい問題点があるではないか。

① 過去7年間で、自民党と民主党だけの党首会談は一度もなかった。2党間の場合は、他の各党の党首とも会談がおこなわれてきた。極めて重要な問題だからこそ、政権与党はすべての野党とも党首会談をおこなうのが「憲政」の正道だろう。『社説』はなぜこのことを問題にしないのか。

② 福田・小沢会談は1時間20分に及んだという。そのため、衆議院テロ特別委員会での野党の質疑が2時間も割かれた。国会軽視である。なぜ批判しないのか。この失われた2時間を補填する誓約はなされたのか。

③ しかも、1時間20分のうち、過半の45分は「二人だけの」会談だという。文字通り密室会談だ。国民にも国会にも口を閉ざす首脳会談は、ほとんど常に党利党略のためだ。なのに、「社説」は、「秘策もあるうから、批判されぬよう気をつけてね」と弁護している。

④ この福田・小沢両党首会談の所要時間の半分以上が全くの密室であったのに、国会での公開党首討論が行われなくなったということからは、国会を自民・民主の2党の恣意のままに運営することを許容することだ。

⑤ 11月1日付5面に、経済同友会の桜井正光

代表幹事が「非公開党首会談を批判」して、「予定を知らせてあるから密室ではナイト（小沢代表が）言ったようだが、それでは一体何が語られたのか、国民には見えてこない」と述べた、と報道されている。31日付「社説」は、こういう批判さえできていない。

中東に戦火ひろげる放火魔に
給油するを人道というか

11月1日付の2面に政治部編集委員・古賀攻氏の論説。「海上自衛隊をインド洋に派遣している意味や効果の検証作業がおろそかになっていた。」「人任せの国際貢献から脱却し、テロと戦う理念を鍛え直す好機と考えれば、意味のある「一時離脱」になる。」

「闘う」ではなく「戦う」とお書きだ。戦争や戦闘をすべきとお考えのようだ。戦争で平和を創出できる、国際貢献は軍事力によるしかない、とお考えなのだろう。これでは戦争は廃絶不可能。

3面で、「日本の離脱は、米国に負担のしわ寄せを強いることになるのが現実だ」、「現在の治安状況では安全確保のために自衛隊派遣が必要で、やはり憲法解釈の問題が生じる」と、上野央絵記者がお書きだ。

そもそも、報復戦争を始めたのが国際法上も道徳的にも間違いだっただの。「負担」は自業自得なのだ。日本は「負担」「分担」すべきではなかったのだ。「治安」を悪化させたのはテロリストをひたすら軍事力で壊滅させようとしてきたからではないか。

日本国民は、国連憲章よりもさらに人道的な憲法をもっているのだ。福田首相は「諸外国から大変感謝されてきたことを考えると、ここで終わってしまふのは非常に寂しい」と語ったという。しかし、福原直樹・小谷守彦・町田幸彦の3記者が書くように、「アフガン派兵ではNATO加盟国の大半が国民の厳しい審判を受けることになる」。

『毎日』は日本国憲法の前文と第9条こそ地球社会の指針と考えないのか。07・11・1須田 稔